

# びんの中の世界

小川未明

青空文庫



まさぼう  
 正坊のおじいさんは、有名な船乗りでした。年をとって、もはや、航海をするこ  
 とができなくなつてからは、家において、ぼんやりと若い時分のことなどをおもい出して、  
 暮らしていられました。

おじいさんは、しまいには、もうろくをされたようです。すくなくも、みんなには、そ  
 う思われたのでした。なぜなら、海の中から拾つてきたような、朽ちかかった一枚の黒い  
 板をたいせつにして、いつまでもそれを大事にして持つていられたからです。

また、おじいさんは、家の前に立つて、あちらの山のいただきをながめながら、

「まだ、こないかいな。」といわれました。

みんなは、それを不思議に思つたのです。

「おじいさん、だれがくるのですか？」と、家の人が聞きますと、

「海から、私を迎えにこなければならぬはずじゃ。」と、おじいさんは、答えられました。

おじいさんが、とうとう亡くなられてしまつてから、おばあさんは、正坊に、よくお  
 じいさんの話をして聞かせました。

「おまえのおじいさんは、有名な船乗りだった。しかし、年を取られてから、もうろく

をなさつて、毎日、あちらの山の方を見て、海から、だれか呼びにくるはずじゃといつていられた……。」

正坊は、おじいさんの話を聞かされたに、なんとなく不思議な感じがしたので。そして、そのことを、まったくもうろくからの言葉ばかりでないというような気がしたのでした。

それで、正坊は、やはり、家の前に立つて、あちらの山をながめていました。青い空の下に山の線が、すその方へなだらかに流れている。夜になると、山の上には、さびしく星が輝いたのである。春から、夏にかけて、その山は紫に見えました。そして、冬になると、山は真っ白になりました。

「雪が、あのよう積もつては、どんな男も山を越してくることはできぬだろう。……しかし、その勇士は、また非凡な術で、雪の上を渡つてこないともかぎらない。」と、冬の晩方など、正坊は、外に立つてながめていたこともありました。

おばあさんは、古くから家にあるのだといつて、あめ色のガラスびんを大事にして、たなの上に飾っておかれました。雪の降るころ、南天の実が赤くなると、おばあさんは切つてきて、そのびんにさして仏さまにあげました。また、春になると、つばきの枝などを

折つてきて、びんにさして、やはり仏壇の前に供えられたのです。

正坊は、なんとなく、そのびんがほしくてなりませんでした。

「おばあさん、あのびんを僕におくれよ。」とねだった。

おばあさんは、なかなか正坊のいうことを聞かれなかった。

「あのびんは、昔から家にあるびんだから、おもちゃにして壊すといけない。」といわれた。

そう聞くと、正坊は、ますますそのびんが欲しくなりました。

昔、酒かなにかはいって、渡ってきたらしくもあれば、また、おじいさんが、船乗りをしていなさる時分、どこかで手にいれたものらしくも思われました。

ある日、正坊は、こつそりと、おばあさんに気づかれぬように、たなの上からびんを取り下ろして、外へ持つて出ました。そして、びんの口に目を当て、太陽の方に向かつて仰ぎました。すると、一人の男が、馬にまたがって、遠い地平線から駈けてくるのが見えます。正坊は、あわてて目を放して、向こうを見ると、どこにもそんな影らしいものはなかった。正坊は、このとき、そのびんを魔法のびんだと知ったのでした。そして、このことをおばあさんに話すと、

「ばか、なにをいう。」と行って、おばあさんは取り上げられませんでした。

正坊は、亡くなられたおじいさんが、待つていられた使いというのは、このびんの中に見える馬に乗った男のことでないかと考えました。もうろくされたおじいさんは、このびんの中に見える男が、いつか、あの山を越えてくるのだと思われたのであろう、と考えました。

しかし、不思議なことは、二度めに、正坊がびんの口にくち目をつけて、空を見たときには、馬に乗った男の影が見えずに、赤い花の咲いた野原に、はるかに、町の姿が小さくなつて見えたことです。

三度めに、彼が、そのびんからのぞいて、かなたを見たときには、前に見たような景色は見えずに、茫々とした海原の中を、ただ一その船がゆく影が見えたのでした。そして、この三つの場面が、びんの口をのぞくたびに、そのときどきに入れ変わつて見えるだけであつて、他の景色は見えなかつたのであります。ある日のこと、

「そう、そのびんを外へ持つて出て、いつか壊すといけない。」と、おばあさんがいわれたのを、正坊は、わざと聞かぬふうをして外へ持つて出ました。

彼は、往來の上に立つて、それをのぞきながら、友だちがやってきたら友だちにももの

ぞかせて自慢じまんをしてやろうと思おもっていました。

このときどこからか、一人ひとりの男おとこが、ほんとうに馬うまに乗のってやってきました。そして正まさ坊ぼうを見みると、ふいに、馬うまを止とめました。

「ちよつとそのびんをお見みせ。」といつて、男おとこはびんを取り上とげて、口くちに目めを当あててのぞきました。

「まことに珍めづらしいびんだ。私わたしは、このびんを探さがしていたのだ。坊ぼうは、私わたしといつしよにこないか？」と、馬うまに乗のっている男おとこはいいました。

正まさ坊ぼうは、かねて、おばあさんから、おじいさんの話はなしを聞きいていました。「おじいさんは、山やまを越こして、だれか、きつと迎むかえにくるといつて待まっていられたそうさ。それは、けつして、もうろくなされたから、そんなことをおつしやられたのでなからう。その男おとこといふのは、きつと、この人ひとにちがいない……。」と、正まさ坊ぼうは心こころの中なかで思おもいました。

「おじいさんは、どこからこられたのですか？」と、正まさ坊ぼうは、たずねました。「海うみからきた。」と、馬うまに乗のっている人ひとは答こたえた。

それで、正まさ坊ぼうは、まさしくこの人ひとだと思おもいましたから、その男おとこのすすめるままに、いつてみよう、と、即座そくざに決けつ心しんしました。

男は、自分の脇に正坊を乗せて、馬にむちを当てました。その馬の脚は速かったのです。森や、川や、丘を過ぎてゆくと、いろいろの美しい花の咲いた野原に出ました。はるか、あちらを見ると、町の屋根が地平線に浮き上がって見えたのです。

「あ、いつかびんの口から、のぞいて見た景色だ！」と、正坊は、思いました。

「おじさん、どこへゆくのか……。」と、正坊はたずねた。

「あの町へゆくのだ。」と、男は、答えました。

やがて町へはいろいろとすると、建物の間から、青黒い海が見えました。

町へはいって、しばらく走ると、馬は、ひさしの深く差し出た、昔ふうの家の前へきて止まりました。男は馬から降りて、内へ向かって声をかけました。すると脊の低い老人が、腰を曲げて出てきました。

「お父さん、ようやく、あなたが、もう一度見たいとおっしゃられたびんを持ってきました。これでございましょう……。」

老人は、歯の抜けた口をもぐもぐさしていましたが、細い、しわだらけの手を出して、びんを受け取りました。そして、びんのまわりをなでまわしていましたが、その口に目をあてて正坊がするように、太陽に向かつて仰いだのです。

「あ、これ、これ、これにちがいない！」と、老人はうれしそうにわめきました。

「私は、やっと、このびんにめぐりあつた。もはや、一生のうちに、めぐりあわないかと思つていた。しかし、おまえのおじいさんは、死になされたとみえる……。」

老人は、びんを持って、暗い家の内へはいりました。しばらくたつと老人は、びんの中へ、ほんとうにわずかばかりの油をいれて二人の前へあらわれました。

「永年しまつておいた油は、もうこればかりになつてしまつた。もうすこし長く月日がつたつたら、油は、一滴もなくなつてしまつただろう……。」

私が、海の上で生活をしていた時分、兄弟の約束をした仲間があつた。二人は、たがいに助けつ、助けられつした。そして、別れる時分に、二人は、もう一度たずね合つてあいたいというまじないから、インドの魔法使いからもらつたびんと中身の油とを別々々に持つて帰つた。こうすれば、いつか、びんと油は、かならずめぐりあうといった魔法使いの言葉を信じたのだ。子供！ おまえのおじいさんは、黒い板を持つていなされたろう……。この油をともし、その板を見るがよい……。」といつて、油のはいつたびんを正坊に渡したのでした。

正坊は、この町と、このおじいさんと、この家をよくおぼえておこうと熱心になが

めていました。

男は、ふたたび、正坊を馬に乗せてくれました。そして自分も乗り、馬にむちを当てると、馬はきた時分の道を走り出しました。日は、いつしか海に沈んで、野原に咲いている赤い花も黒ずんで見えたのであります。そして、月が大空に上がり、その下を流れている川の水が、一筋の銀の棒を置いたように、白く光って見えたのでした。

ふたりを乗せた馬は、村の往來までくると止まりました。そこからは、もう、正坊のお家がじきだったのです。

「さあ、もうここからなら、ひとりで帰れるだろう。」と行って、男は、正坊を馬の脊から下ろしてくれました。

「おじさん、あの町は、なんとというの？」と、正坊は、振り返って問いました。

「……………」と、男は、いい残して、馬にむちをあてて去りました。

正坊は、男のいった言葉が、よく、はつきりと耳にはいらなかった。そのうちに、ひづめの音は遠ざかり、影は、月の明かりに、だんだん小さくかすんだのです。

おばあさんは、門から出たり、入ったりして、正坊を探していられた。そこへ、正坊は帰って、その日のできごとの話をすると、おばあさんは、頭を振って、

「ばか、なにをいう。きつと、おまえは、きつねにでもばかされたのだろう……。」「といわれしました。

正坊は、町の名を聞きもらしたのが残念でした。おそらくそのことは、永久に、彼にとつて残念であったにちがいない。なぜなら子供の頭で、いつまでも、町をおぼえていることは不可能であったから……。

しかし、それが夢でないことは、びんの中に油がはいっていたことでした。すぐに、土器にうつして、火をつけて、正坊は、おばあさんと二人で、黒い板を見ました――。異様な、帆船の姿が、ありありと板の面に見えたかと思うと、また、その姿は、煙のごとく、しだいにうすれて消えてしまった。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷

底本の親本：「未明童話集2」丸善

1927（昭和2）年9月20日発行

初出：「赤い鳥」

1927（昭和2）年1月号

※表題は底本では、「びんの中《なか》の世界《せかい》」となっています。

※初出時の表題は「壇の中の世界」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：へくしん

2020年3月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作ら

れました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# びんの中の世界

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>